

# ジャガイモ (ナス科)

南米高地の原産で寒さには強いが暑さに弱い。ジャガタラ(ジャワ)から渡来したのでジャガイモと呼ばれる。

作型	月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
春	作			定植	—	—	—	—	—	—	—	—	—
秋	作									定植	—	—	—

### 1) 適地

高地の植物なので、冷涼な気候を好み、15~20℃が生育の適温です。高温でイモの肥大が悪くなり、29℃以上で生育が止まってしまいます。土壌に対する適応性は広いのですが、排水がよく耕土の深い有機質に富む肥えた土質が特に適します。排水の悪い畑では病害の発生が多く、味も劣るので、このような場所では高畝にします。砂質の軽い土は生育が早く、早掘りに適しますが、収量は多くなく、やや粘質の土で多収が得られます。秋作にはやや粘質の土壌の方が適します。

### 2) 品種

春作と秋作では品種が異なり、秋作は休眠期間の短い品種が用いられます。また、シードポテトといって、種子から育てるジャガイモもあります。

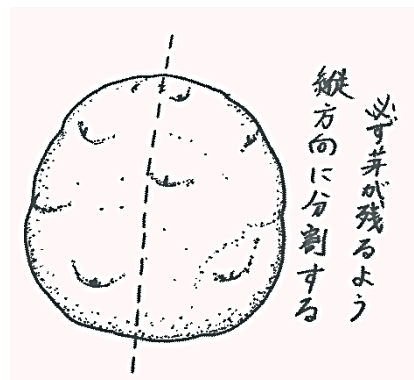
春作に適する品種：男爵、メークイン、アンデス、紅丸、とうや、十勝こがね

秋作に適する品種：デジマ、タチバナ、農林1号

シードポテトの品種：ホワイトアンドホワイト

### 3) 作り方

【圃場の準備】 連作障害が発生しやすいので、ナス科の野菜が最低3年間は作付けされていない場所を選びます。定植の1か月前に1m<sup>2</sup>当たり2kgの堆肥を施用し、深く耕します。土壌がアルカリ性になると病害が発生しやすいので、石灰は施用しないか、1m<sup>2</sup>当たり50g程度にとどめます。定植時に幅60~70cmくらいの畝を立てます。排水の悪い畑では畝を高めになります。畝の中央部に植え溝を掘り、基肥は植えつけの時に



種イモの切断方法

植え溝のイモとイモの間に高度化成肥料を1か所当たり20g施します。マルチ栽培の場合は、1m<sup>2</sup>当たり高度化成肥料を80g施用し、土寄せができない分畝は高めにします。ジャガイモは生育初期に肥料を効かせて株を作り、開花以降は肥料が切れるように栽培するのがポイントです。開花の頃に茎が徒長して倒れたり、遅くまで葉が青く繁っているようなら肥料の効きすぎで、このような株はイモの肥大が悪く、味も劣ります。前作の肥料が残っているような畑では、施肥量を減らすようにします。



定植直前の種イモ

【定植】新芽は霜に弱いので、春作は晩霜の心配がなくなってから地上に芽を出すように3月中旬頃に植えつけます。植付けが遅くなる場合でも、4月5日頃までなら十分な収穫が得られます。秋作は霜が降りるまでに十分大きくするため、8月下旬に芽の出た種イモを定植します。種イモは市販されている無

病のものを利用します。種イモが60g（卵くらいの大きさ）より大きい場合は、芽を二つ以上つけて切り分けます。切り分けた種イモは、切断面に石灰をまぶしてから定植すると、腐敗による欠株が少なくなります。定植は植え溝に切り口を下にして株間20～30cmで並べ、7～8cm覆土します。春作の場合、黒のポリマルチをすると草が抑えられるとともに、地温が高まって収穫期が早まりますが、秋作の場合は地温が上がりすぎるのでマルチは適しません。

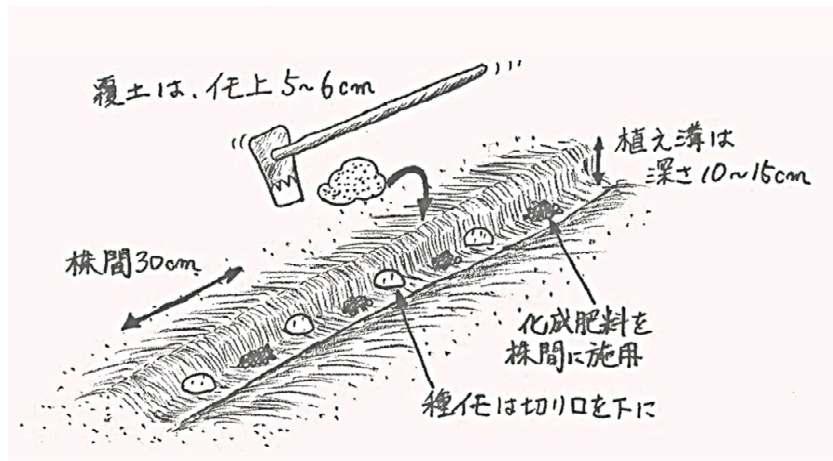
【芽掻き】芽数が多いとイモが小さくなりますので、強い芽を1株当たり2～3本残して株元から掻き取ります。マルチした場合は、芽が伸びてマルチを押し上げてきたら遅れないように穴を開けて2～3本だけ芽を出してやります。

【追肥・土寄せ】マルチをしていない場合は、芽が15cmくらい伸びた頃とその10日後くらいに土寄せを行います。イモが大きくなるにつれて押し合っ、地表へ押し上げられてきますので、露出しないよう株元に5cmくらいずつ土を寄せます。追肥は土寄せ時にそれぞれ高度化成肥料で1㎡当たり30g程度施します。

【収穫】花が咲き出す頃になるとイモも少し大きくなってきています。探り掘りして早めに収穫するのも楽しみです、甘くてなかなかおいしいです。ただし、収穫の適期は、春作なら茎葉が黄変した時期で、適期に収穫したイモはデンプン価が高く、貯蔵性も優れます。秋作では1～2回霜に当たってから収穫するようにします。掘り取りは晴天の日に行い、掘り取ったイモは冷暗所で自然に乾燥させます。

#### 4) 病害虫防除

アブラムシ類、オオニジュウヤホシテントウが多発します。病害では土がアルカリ性に傾くと、そうか病が発生するので、基肥の石灰の施用を控えるとともに、植付け前に種イモの消毒を行います。



種イモの定植方法



開花期の圃場



そうか病